特定非営利活動法人 市民シンクタンクひと・まち社

ひと・まち

No.83

2025 年 1 月 20 日発行 (季刊)

Contents

P 2 にじっ子サポーターズの活動紹介
P 4 学童保育クラブ見学記
第 24 回総会を開催します

認定 NPO 法人 市民シンクタンクひと・まち社
〒 160-0021 新宿区歌舞伎町 2-19-13 ASK ビル 501
TEL 03-3204-4342 FAX 03-6457-6202
E-mail npo@hitomachi.org
URL：http//www.hitomachi.org
郵便振替口座 00170-6-410791 NPO 法人市民シンクタンクひと・まち社

衆議院議員選挙後の政党政治

早稲田大学名誉教授 坪 郷 實

自公政権の過半数割れ

2024 年 10 月 27 日に行われた衆院選では、石破茂自公政権は目標とした過半数を獲得できず、2009 年の民主党主導政権への政権交代以来の大敗を喫した。他方、野党は全体で過半数を上回り、立憲民主党は 50 議席増え 148 議席、国民民主党は 21 議席増え 28 議席と躍進したが、野党第一党の立憲民主党は多数派を形成できなかった。

候補者のうち女性が占める割合は 23.4%と過去最高であるが、国政選挙の候補者に占める女性の割合を 2025 年に35%にするという目標を下回っている。当選者も73人、女性議員の割合は 15.7%（2009 年 11.3%）と過去最高とはいえ、低いままである。依然として「男性中心の組織」である政党を変えるために、候補者男女均等法では政党の数値目標の達成は努力義務であるが、政党に女性候補者の割合を 40%（50%）にすることを義務付ける法改正が必要である。

衆院選で、有権者が最も関心のあったのは、「政治とカネ」問題であり、さらに物価高と経済政策、社会保障政策、外交安保政策である。今回は、小選挙区における野党間の候補者調整は一部で行われたのみで、野党候補が乱立し、自公政権への批判票は分散するとみられ、投票率も戦後三番目に低かった。それでも、自民党が大敗したのは、それだけ有権者、特に自民党支持者が「今回は自民党にお灸をすえる」ため、一部は棄権し、一部は立憲民主党や国民民主党への上積み票となり、両党は議席を増やした。だが、事前に立憲民主党の政権政策と政権構想が明確ではなく、9 月の代表選で選ばれた野田佳彦代表は政権交代を目指すことを表明したが、その期待は高まらず、国民民主党、日本維新の会は早々と立憲民主党との連携を否定し、立憲民主党は主導権を取れなかった。

政党政治のゆくえ

補正予算の成立にみられたように、石破自公少数政権は、少なくとも野党の一部の支持がなければ、衆議院で法律や予算を通すことができない。石破政権は、与党内の同意の調達と与野党間の合意形成を必要とし、「綱渡りの政権運営」を迫られる。選挙結果から政治改革が優先課題であるが、道半ばであり、「企業・団体献金の禁止」については 3 月末まで先延ばしになり、「政治とカネ」への不信は払拭されていない。国民民主党の躍進につながった「103 万円の壁」については、自公と国民民主党との協議が行われている。しかし、政策協議は、関連政策も含めて多角的な審議が必要である。国会外の一部の政党間の協議ではなく、委員会審議をはじめとして透明性のある、政党間での熟議が行われる国会での審議を重視することが肝要である。「熟議が行われる国会」の実現の機会とすべきである。

自民党総裁選での石破総裁の選出と衆院選での自民党の敗北によって、岸田政権まで続いた一強多弱の体制は終わった。この機会は、日本の政党政治の転換点の始まりであろうか？今後の展開を考えると、立憲民主党が政権政策や政権構想を明確にし、政権交代を目指すことができるのか？自民党が党の刷新を成し遂げ、再び自民党優位の体制が復活するのか？あるいは、今回の選挙は、与党も含めて政党再編が行われ、日本の政党政治が大きく変わる兆しなのか？6～7 月頃の都議会議員選挙を経て、7 月の参議院議員選挙が試金石になろう。

自民党より右の政党の議席獲得をどう見るか、SNS などインターネット選挙の課題など、懸念すべきことは多い。どのような道を歩むのか、政党政治のゆくえは有権者の行動次第である。市民活動団体がこれまで取り組んできたように、政策提言活動を一層強化することにより、政党を鍛えることが肝要と思う。

子どもが「にじ色」に輝けるように…
～にじっ子サポーターズの活動紹介～

にじっ子サポーターズ　共同代表 今井美栄子

高齢者や子どもの孤立を防ぐために、身近な地域の中で人々がつながりあうことができるようにと、認知症カフェや子ども食堂、子育てサロンなど市民による居場所づくりの活動が生まれています。どの活動も場所の確保が課題です。今回は、人とつながりあいながら元気に活動している「にじっ子サポーターズ」をご紹介します。

活動を始めたきっかけ

目黒区主催の「発達サポーター育星講座 基礎 b」（講師：星山麻木　明星大学教育学部教育学科教授）の受講生数人が、講座の最終日に LINE グループを作ったことから始まりました。その LINE グループに付けた名前が「にじっ子サポーターズ」だったのです。

毎年大人気で抽選になるこの「育星講座」には、我が子の発達が気になる親、発達障害などを含む様々な要因で不登校になっているお子さんの親、そのような子どもたちの支援に興味がある人、などが集っています。

星山先生のお話は、いつも一つの信念に貫かれています。それは「人は生まれながらに誰もが『にじ色』。特性のない人などいない。学校に行きづらい子は、今の学校のやり方が合っていないだけ。自分に合った学び方をすれば、自分らしい生き方ができる。」というもの。その考えは毎回、「なんとか子どもを学校に合わせなくては！」と悩んでいる親の心をときほぐしてくれ、支援者の進むべき方向を示してくれます。

講座が終わった後も、語り合い、にじ色な子どもたちを認め合い、つながることで、何かいい方向に進めるのではないか、そんな思いから「にじっ子サポーターズ」は始まりました。

すべては「にじカフェ」から

いちばん最初の活動は、神奈川県藤沢市で活動している NPO 法人「優タウン」（旧・ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト）を見学に行ったことでした。「優タウン」は、代表の方がお子さんの不登校をきっかけに立ち上げた団体で、「朝カフェ」という親のおしゃべり会を定期的に開催。そこで「にじっ子サポーターズ」でも真似をして、「にじカフェ」という名前で、不登校や発達障害のお子さんを持つ家族の会を開いていくことにしました。

月一開催の家族会「にじカフェ」（2022 年 9 月）。予約なしで来ることができ、お互いに子どもや学校の悩みを聞き合います。公共施設や、中目黒のライブハウス「楽屋」の昼間のスペースをお借りしてやっています

やってみると、半年もしないうちに口コミでどんどん広がって参加人数が増え始め、1年後には一度に 15 人以上も集まるような時もあり、開催場所に困るほどでした。

各自が自己紹介をしておしゃべりするだけなのですが、みなさん子どもの状態や悩みについて堰を切ったように語られ（時には涙しながら…）、２時間で全員の自己紹介が終わりきらないこともしばしばでした。参加したみなさんが口々におっしゃったのは、次のようなことでした。「子どもが不登校ではないママ友には話しにくく、孤独だった。」「探しても目黒区には家族会がなかった。やっと出会えた！」「同じような境遇の人に、学校とのやりとりや、子どものその後の経過について聞きたかった。」「うちだけではないと分かり、少し気が楽になった。」

子どもが学校に行かなくなると、急に何も情報が入らなくなり、ママ友と話す機会も減ります。不登校が急増している今、どこの学校にも、あるいは同じクラスの中にも、不登校の子はいるかもしれないのに知り合うすべはありません。本来ヒトは一人で子育てはできないのに、完全なひとりぼっちになってしまう……その孤独と不安はいかばかりでしょう。

「にじカフェ」で話しただけで、我が子が明日から学校に行くわけではなく、現実は何も変わらないかもしれません。にもかかわらず、「聞いてくれて、うれしかった。」と言って、少し明るい表情になって帰っていかれる姿を見て、「ただ話して聞くだけ」…そんな「親支援」こそがとても大切なのだと知りました。

だんだん活動が広がって……

学校に行けなくなることには千差万別の理由があるようです。また、学校に行っていても困っている子、それをうまく言えない子もいる、ということも、活動の中でいろいろなお子さんの話を聞いたり接したりしているうちに、わかってきました。

もしも取り除けるような理由だったら、少し配慮して欲しい。そう考えて、親が学校に要望をする場合、制度の壁に阻まれることがよくあります。どのようなことに困っているかを声に出して伝えることで、少しずつ「にじ色」の子ど

もそれぞれに対応した支援ができるようになってくれればと思います。そんな私たちの思いを知ってもらうため、社会福祉協議会や区議会議員の方々には、今まで何度か「にじカフェ」を見学に来ていただきました。

親たちのいちばんの望みは、家にいる子どもたちが外と関わりを持てること。子どもそれぞれに合った、学校以外の「居場所」があること。のんびりしたい子は遠慮なくのんびりとでき、勉強したくなったら教えてくれる人がいて、年齢の近い友達や、少し年上の若者たちなど、親とは違う人と触れ合えること。

一昔前は地域に普通にあった、そんなゆるゆるとした空間が、仲間が、時間が、現代は失われています。今の子どもには、そんな「秘密基地」のような「逃げ場」がなく、生きづらさにもつながっているのではないでしょうか。

親同士がつながることで、そのような場所が生み出せないかと、イベントも企画するようになりました。バーベキューや遠足、自由工作ざんまいの会、土いじり、音楽ワークショップ、ライブハウスを借りた音楽パフォーマンス会、などをやってきました。

引きこもりがちな子どもが一歩を踏み出すのはそう簡単なことではなく、大人の思うようには行きませんが、時間をかければ少しずつ心を開いてくれる子もいます。地域のお店や学生ボランティアなどの手も借りて、今後も続けていきたいと思っています。

そして、親自身が楽しむことも大切ということにも気がつきました。親が暗い顔ばかりしていれば、子どもは「自分が心配をかけているせいだ」と感じ、家の雰囲気はますます悪くなりがちです。隠れた特技や趣味を生かした、親同士のワークショップなども開いています。

また、もともと「発達」に関する講座から生まれた「にじっ子サポーターズ」には、目黒区の小学校や中学校で「特別支援教育支援員」をやっている人も何人かいます。目黒区では有償ボランティアの立場ではありますが、少しでも子どものためになる支援がしたいと、支援員同士で勉強会を開いたりもしています。

こんな学校になったらいいな…

「にじっ子サポーターズ」で、「バイブル」となっている映画があります。今から10年前に制作された、大阪の公立小・大空小学校を舞台に撮られたドキュメンタリー映画『みんなの学校』です。今の学校教育に一石を投じる内容で、常に全国あちこちで自主上映されています。

この映画の中では、特別支援教育の対象となる子も、自分の気持ちをうまくコントロールできない子も、みんな同じ教室で学んでいます。児童と教職員だけでなく、保護者や地域の人もいっしょになって、誰もが通い続けることができる学校を作りあげています。

みんなが居られる教室は、みんなが安心できる教室。子どもたちの多様な色を受け入れてくれる教室。それなら不登校というものも、生まれないのではないか。私たちはそんなふうに考えています。

これから目指していきたいこと

目黒区で子育て支援活動が難しいことの大きな要因は、場所代が高いことです。どの団体も喉から手が出るほど、みんなが集える支援拠点が欲しいと思っています。ぜひ行政にはそこを助けていただき、官民連携で子どもたちにたくさんの選択肢を提供していけるようにしていきたいです。

そして、子どもを真ん中にして大人みんなで見守り、子どもの声（大きい声だけでなく、小さい声も）をしっかり聞きながら、学校や社会を作っていけたらと思います。

抽選に応募して区民農園を借り、協力して野菜を育てています（2022年10月）。土いじりで自然と触れ合うと、子どもも大人も心が開放されます

年1回開催の「音楽ワークショップと遊びのレストラン」で、来場した子どもたちが作った作品（2022年11月）。いろいろな素材をたくさん用意しておき、朝から夕方までやりたいことを自由にできる空間です

年2回開催の「にじっ子LIVE」(2023年3月)。老若男女、うまいヘタ関係なく、飛び入りで誰でも自由にパフォーマンスができます。中目黒のライブハウス「楽屋」の昼間のスペースをお借りしています

評価室から　－学童保育クラブ見学記－

学童保育クラブは、1948 年に大阪市の今川学園で始めたと言われています。その5年後に都立保育園園長会が、設置運動をはじめ、学齢期の子ども達が放課後に安全に過ごせる生活の場を確保する民間運動の中で、保護者自身の手による共同保育所として始まったとのことです。

設置の法的根拠は児童福祉法で、放課後児童健全育成事業として位置付けられています。

運営にあたっては、厚労省から、放課後児童クラブ運営指針が発出され、児童期の発達の特徴、職員体制、集団の規模、学校及び地域との関係、施設及び設備、社会的責任と職場倫理等こと細やかな内容になっています。

また、事業そのものは市区町村の事業ですが、運営主体は、公設・公営、公設・民営、民設・民営とあり、公設・民営が全体の　ほぼ半分になっています。民営としては、社会福祉法人、NPO 等の団体や個人もあり、この場合は自治体からの受託事業になります。

上目黒住区センター児童館学童保育クラブ

見学した学童保育クラブは、区の学童保育クラブ保育指針に基づいて運営されています。ご多忙の中を館長さんが全館の案内や資料に基づき丁寧なご説明をしてくださり質問にも答えて下さいました。以下は、館長さんからご説明を受けたことの一部です。

職員総数は7人、職員の必要な資格は、保育士、社会福祉士、教員、児童福祉事業に2年間以上従事していることなど、複数小学校に通う児童に対応、親との連絡ツールとして連絡帳を活用している、児童館と学童クラブの子どもたちは、おやつ等の時間以外は一緒に遊んでいます。

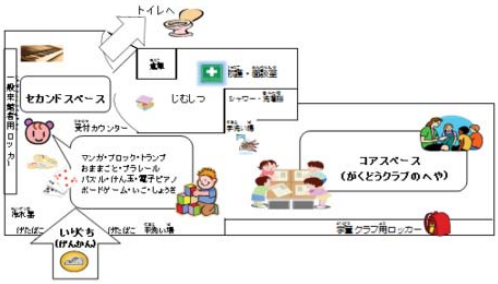
保護者会では、保育目標・目指す子ども像・今年度特に大切にしたいこと、具体的な保育計画、遊びのこと・学習のこと、生活にかかわること、家庭・地域・学校とのつながり、年間行事予定等を一覧にした資料を配付して学童保育のことを説明しています。

高 橋 計 之

「子どもスッキプ目白」豊島区立目白小学校内に設置

豊島区は10年前に児童館を廃止し、放課後児童健全育成事業を提供するとして「子どもスキップ」を作りました。小学校内や区立施設敷地内、学校等隣接地にあり、区内の小学生が利用できます。

スキップ目白には学童クラブ登録児童122名（2024 年10月現在）で、直接利用できる児童は569名です。専用スペースはクラブ室（学童クラブ利用児童対象）とセカンドスペース（一般利用児童対象）の2部屋ですが、学校内にある特性を生かして隣室の和室やヒマラヤホール（音楽室）の1/2や校庭が使えます。学童クラブには1日122名、直接利用20名合計140名以上の児童が通うので、職員は気が抜けません。どの子どもが利用して何時に帰るのかのチェックから始まり、学童クラブ子ども達の連絡帳のチェック、様子観察、プログラムの提供、子ども間の交流援助と多忙です。和室は宿題をやったり本を読んだり、静かに過ごしたい子ども達が利用し、ヒマラヤホールや校庭では体を動かします。この他、毎年地域子ども懇談会を開催し、年間事業計画・安全計画や実施報告等の地域への情報提供や子どもに関する情報交換を行っています。



私が良いと思ったのは、放課後子ども教室担当職員（教育委員会職員）と地域ボランティアで運営している「子ども教室」（ダンス教室、バトミントン教室、囲碁教室等各種あり）で、スキップの行事以外にも参加できることです。もう一つは、「こども会議」です。子ども会議では子どもの中からオモチャ選定委員を募って、自分達で使うオモチャの決定をする等しています。

地域力を発揮する場として、子どもの自主性を育成する場として、子どもスキップの今後益々の発展を願った見学でした。

大塚政子

第 24 回総会を開催します

介護保険の改正でサービスが使えなくなるという声を受け、ひと・まち社でも久しぶりに介護予防に関する調査を再開し、現在集計・分析を行っています。

第三者評価事業については昨年に引き続き 50 件を超える依頼がありました。事業所ではコロナ禍で途切れた地域との関係性を再構築するための取り組みはボランティアの高齢化、人手不足などの問題で、厳しい様子が伺えます。第三者評価を通して少しでもサービスの質の向上につなげられるよう、評価者の育成にも取り組んでいきたいと思います。

認定 NPO　市民シンクタンクひと・まち社
第 24 回総会
日時：2025 年 3 月 28 日（金）15 時～ 17 時
会場：ASK ビル 4 階会議室
（Zoom での参加をご希望の方は早めに連絡をお願いします

メールアドレス登録のお願い
ひと・まち社では SDG s の取り組みとしてペーパレスをすすめています。今後の機関紙「ひと・まち」の電子データでの発信をすすめています。通信購読をご希望の皆様にはメールアドレスのご登録へのご協力をお願い致します。npo@hitomachi.org

ひと・まち社へのご寄付をお願いいたします
振込先口座
特定非営利活動法人市民シンクタンクひとまち社
三菱 UFJ 銀行　新宿中央支店　普通　5298170

編集後記：能登半島地震から1年、交通手段がなんとか整えられつつあるが、インフラの老朽化、人手不足が復旧作業を阻み、さらに自然災害が追い打ちをかける。そうした中で1年遅れの「二十歳の集い」が開催された。色鮮やかな振袖を身にまとう新成人の姿に、改めて人生の門出を祝福したい。(M)